

## 玉堂父子、林原から県美へ

守安 収

去る2月8日、林原美術館は所蔵する浦上玉堂、春琴・秋琴父子の遺品類計143点を岡山県立美術館に寄贈すると発表しました。当日、私も記者会見のマイクの前に座り、関係各位に深甚の感謝の意を表明し、あわせて従来コレクションに加えるとわが館が国内外での玉堂研究のメッカになるという趣旨の発言をしたところです。▼今回の遺品類はすべて平成6、7年に玉堂直系子孫(春琴長女恒と秋琴次男宗尚との婚姻で家が継承された)である浦上紀之氏(福岡市在住)がご父君の遺志を承け、伝来品を姻戚関係(氏のご母堂が林原美術館創設者の妹)にある同館に寄贈したものです。それは郷土の美術館の常設展示室での公開を願ってのことでしたが、同館の管理体制が変わったことなど諸事情を踏まえ、浦上家・美術館双方が一致して玉堂研究と活用のより一層の進展を図るため、県立美術館へという今回の次第に至りました。▼玉堂父子は私どもにとって常設展「岡山の美術」の運営においても特別展を企画するに際しても、不可欠の存在ですから寄贈は何よりも嬉しいことです。しかし、期待に応える活動を展開しなければ受け入れ責任を果たすことはできません。関係者の総意とはいえ、私立から公立へ、同業の美術館への寄贈という異例の経緯をたどった貴重な資料群を積極的に活用することを通じて私どもは責任を形であらわし、お礼にかえる決意です。▼当館ではこの秋、9月23日(金)から10月30日(日)まで特別展「文人として生きる一浦上玉堂、春琴・秋琴父子の芸術」を開催いたします。



 岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

## 編集後記

大山真季

美術館ニュース112号をお届けします。3月から引き続き「宮川香山展」で新年度が始まりました。今年は宮川香山没後100年と言うことで「香山イヤー」と言えるほど、香山や明治の陶芸に関する展覧会が各地で開催されています。同じ岡山では「岡山・吉兆庵美術館」でも「宮川香山展」を開催中で、当館と連携した相互割引サービスも実施しています。また、次回開催の「原田直次郎展」では、香山と同じく動乱の明治の時代を生きた画家・原田直次郎の生涯に迫ります。領域は違えど、同じ時代を生き、海外との関わりも深かった2人の作家にぜひご注目下さい。

## 「美術館の紹介」vol.12

岡山県の特産品である万成石で作られた当館の壁面には、所々金属が象嵌のように埋め込まれている。万成石の有機的な模様や桜色の肌合いとステンレスの無機質な質感の対比が美しい。

## 香山から広がる世界 —宮川香山展によせて—

福富 幸(主任学芸員)



『第二回内国勸業博覧会写真帖』明治14(1881)年 東京国立博物館 Image:TNM Image Archives

連ドラもさることながら、ここのところ美術界でも明治時代が大人気。数十年ぶりの流行がきているみたい。さほど意識したわけではないのだが、当館でも宮川香山展、そして原田直次郎展と、明治期に活躍した作家の回顧展を相次いで開催する。ぜひ香山ファンには原田展を、洋画ファンには香山展を見てほしい。ふたりはまさに同じ時代を生きた作家だから。そして工芸に関して言えば、2013-14年に開催した「フランス印象派の陶磁器1866-1868」展、2011年に開催したエルミタージュ美術館所蔵品の「皇帝の愛したガラス」展なども思い返してほしい。これらの展覧会ではヨーロッパへ渡った日本の浮世絵や北斎漫画、陶磁器や漆器が西欧にどんな影響を及ぼしたかを紹介した。皆、同じ時代のどこかでつながりをもった作品群だ。世界がぐっと身近に感じられる。

宮川香山(1842-1916)本名虎之助。京都の陶家に生まれ、若くして家督を継いだ。明治を迎えた頃、岡山の虫明に訪れた。岡山では使用された印により「真葛」と言った方がとおりがよいかもしれない。動乱の時代がどんな状況であったのか、なんとなく小説やドラマの様から想像するほかないのだが、そんなややこしい時に何故、香山は岡山へ来たのだろうか?香山を招聘したという岡山藩筆頭家老伊木忠澄(三猿斎)にしても、焼き物のことを考える、そんな悠長な時間があったのだろうか?と疑問は尽きない。この時の香山や伊木家の状況を客観的に見る資料に欠くが、香山が岡山に来たことは明らか。「香山=真葛」作とされる作品も現存しており、不思議な縁がある。

香山がその名を世界に知られるようになったのは、岡山を離れ、横浜へ移住して後。窯業地でもなかった横浜に窯を築くという香山のチャレンジ精神とそれを可能にした横浜という町のエネルギーに思いをはせる。海外輸出向けの陶磁器を製作し、最初の舞台は明治9年フィラデルフィア万国博覧会。そして後に重要文化財に指定される《褐釉蟹貼付台付鉢》が出品されたのが、明治14年の第2回内国勸業博覧会。築窯からわずか10年。この第2回内国勸業博覧会に香山が出品したものがすごい。美術館の前庭に設置された3mを越える巨大な陶製の壺、その周りには能の狸々を舞う等身大の4人の人物像が配置された《噴水器陶人物錦手》。当時の錦絵にも取り上げられ、新進気鋭の作家として大いに衆目を集めたことだ

ろう。前年、勸世流梅若実が香山のもとへ狸々の装束を持って訪ねてきていることがわかっている。「博覧会」に合わせた趣向であったことが推測できる。また今日の「工芸」と「彫刻」というジャンル分けが未分化であった当時の様相もよくわかる。香山はこの時、七宝にも取り組んでいる。《七宝筒型灯籠鳩細工桜》のような作品であったろうか。

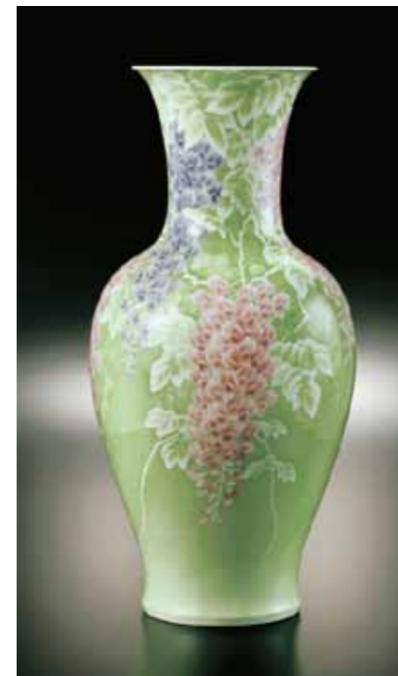
香山の高浮彫はこの頃がピークとされる。本展では、当時、輸出向け陶磁器として大流行した薩摩焼と各地で焼かれた薩摩手の作品を紹介しているが、香山の高浮彫の「浮き上がり度」が半端じゃないことは一目瞭然。薩摩を模した白い素地に描かれるモチーフそのものが絵画的で叙情的、物語的展開が想像され、まるで飛び出す絵本のような。そして上下に描かれる織物のような有職文様も他の薩摩手とは異なり、香山の個性が際立つ。

その後、一転して香山は釉薬物、磁器物へと主軸を移すようになる。社会的には海外市場がゴテゴテした装飾に飽きてきた、あるいは松方デフレの影響で業績が悪化したということが考えられる。明治21年には家督を二代香山(半之助)に譲り、工房経営は二代に任せて自身は釉薬の研究に没頭したようだ。釉薬研究の手本となるのは、日本のみならず欧米でも人気の高かった中国陶磁であり、主題も中国的な龍や梅、山水など中国趣味的なものが増える。明治期後半になると、ヨーロッパではジャポニスムから展開したアールヌーボーが全盛となり、日本に逆輸入してくる。釉薬の研究、デザイン意匠の改革は、日本各地の窯業地で取り組まれた課題であった。時代の要請に応えるように香山は、釉薬一つとっても朱、紅、ピンク、紫、黄、緑、青、白と実に多彩で色鮮やかな作品を作り出している。釉色の違いだけではなく、アールヌーボー調の意匠や仁清写、乾山写、どこかイスラム陶器を思わせるような作品があったり焼き締め陶があったりとバリエーションが豊富。海外市場だけではなく国内需要も視野に入れた作品づくり。それ故、一言で香山作品を語ることはとても難しいのだが、香山の全容を概観するとその多様性は元来、京焼が持っていたものであることに気づく。

そもそも香山は岡山へ来る前、京都でどんなものを作っていたのだろうか?そして香山の工房とともに制作に携わっていた職人たちはどこからきたのだろうか?(虫明の森香洲もおそらくその一人)。「京焼」から勉強しなくちゃ、というのが香山展の収穫であった。



《七宝筒型灯籠鳩細工桜》明治時代(19c.後半)  
山本博コレクション(真葛ミュージアム保管)



《緑釉藤花瓶》明治時代(19c.後半-20c.前半)  
山本博コレクション(真葛ミュージアム保管)

## 原田直次郎 西洋画は益々奨励すべし

橋村 直樹(学芸員)

明治を代表する洋画家・原田直次郎は、幕末の文久3年8月30日(陽暦1863年10月12日)に江戸小石川で生まれた。岡山鴨方藩士で幕末と維新後に二度の滞欧経験を持つ先進的な父一道のもと、三歳上の兄豊吉とともにフランス語を学ぶなど、原田は西洋文化に対して開かれた環境に育った。やがて洋画の道を志すようになり、はじめ山岡成章に学び、1883(明治16)年には高橋由一の天絵学舎に入門した。しかし翌年、さらなる洋画修行の場を海外に求めることになる。

幼少の頃からフランス語を学んでいた原田であったが、長くドイツに留学してミュンヘン美術アカデミーの教授ガブリエル・フォン・マックスと懇意だった地質学者の兄豊吉の勧めにより、同地に留学することになった。ミュンヘン到着後すぐに美術アカデミーに登録するも、兄と旧知のマックスがすでにアカデミーを去っていたため、彼の個人アトリエにも通った。こうしてミュンヘンにおいて原田は、アカデミーで本格的な美術教育を受けながら、私的にマックスにも師事し、画家の友人たちとも刺激を与え合って制作に励み、《風景》(図1)のような滞独時代を代表する作品を残した。また、終生にわたる友情を育むことになる森鷗外と出会ったのもこの地においてである。

1887(明治20)年7月、西洋絵画の高い技術を身につけて意気揚々と帰国した原田であったが、当時の日本は洋画排斥の潮流の真っ只中にあった。そのような状況下でも原田は、「西洋画は益々奨励すべし」と謳い、洋画の普及と後進の育成に励んだ。1890(明治23)年の第三回内国勲業博覧会では、西洋絵画の技術を駆使して龍と観音を生々しく描いた《騎龍観音》(図2)を出品して観る者を驚かせ、様々な議論を巻き起こした。また1889(明治22)年には画塾「鍾美館」を開校し、伊藤快彦や三宅克己、和田英作や大下藤次郎など、後に日本の洋画を牽引することになる画家たちを指導した。しかし、やがて原田は病に罹り、1895(明治28)年には鍾美館を閉鎖することになる。病床の中でも制作を続けた原田であったが、1899(明治32)年12月26日、36歳の若さで亡くなった。

没後10年の1909(明治42)年11月28日、東京美術学校の校友会倶楽部で原田直次郎の遺作展覧会が一日だけ行われた。「原田は素と淡きこと水の如き人なり。余平生甚だこれを愛す」と原田を評した畏友・森鷗外の尽力による結果であった。この遺作展以降、原田直次郎の回顧展はこれまで開催されてこなかったが、今年、107年ぶりに原田直次郎展が全国4会場(埼玉県立近代美術館・神奈川県立近代美術館葉山・当館・島根県立石見美術館)で開催されることになった(当館の会期は5月27日から7月10日まで)。西洋画の普及と発展に尽力し、幕末から明治を駆け抜けた原田直次郎の36年の生涯と画業に迫る特別展「原田直次郎 西洋画は益々奨励すべし」にご期待ください。



図1. 原田直次郎《風景》1886年 本館蔵



図2. 重要文化財 原田直次郎《騎龍観音》1890年 護国寺

## めぐりあう人と作品 「I氏賞受賞作家展」回想

古川 文子(学芸員)



加藤竜《環境ウォーズ》2014年 個人蔵



下道基行 [torii]・[Dusk/Dawn]シリーズ展示風景



2015年11月7日アーティストトークより(左:加藤竜氏、右:下道基行氏)



当館では毎年、岡山県新進美術家育成「I氏賞」の受賞者を紹介する展覧会を開催しています。このたびは、第5回(2011年度)・6回(2012年度)に大賞を受けた、加藤竜と下道基行の作品を2階展示室でご覧いただきました。(2015年11月6日-12月13日)

1978年岡山県新見市生まれの加藤竜さんは、現在ベルリンを拠点に活動しています。油絵具の鮮やかな色彩を活かし、力強い筆致で取り組むのは、世界規模で深刻化する環境問題です。会期中のアーティストトークでは、囲碁の修行のために上京し、故郷の自然への思いを募らせた少年期の心情も語られていました。彼の郷里にひろがる緑ゆたかな山並みと澄んだ青空が、気迫あふれる表現の原動力となっていることを改めて実感しました。

同じく78年生まれの下道基行さんは、岡山市の出身。国内外を舞台に写真による表現活動を展開しています。今回の展示では、「I氏賞」受賞を契機に自ら立ち上げた出版社での写真集制作についても、作品とともにご紹介しました。日常的な風景の中に埋もれた記憶や感覚を引き出すような手法は、小学生の頃に操山周辺を探索し描いたと語る古墳の地図に繋がっているのかも知れません。

強烈なメッセージを放つ油彩画と見る者の意識を呼びさます写真、動と静がせめぎあう会場には、今を生きる作家の息吹が感じられました。ともに絵画を学んだ時期もある同い年のふたりが、ふるさと岡山に集うのもまたとない機会。過去と未来を結ぶ直線的な時間ではなく、冬が終わりまた春が訪れるように循環する時の流れの中で、人と作品が“めぐりあう”空間を、今後も多くの方に共有していただきたいものです。

今年度選考を重ねた第9回「I氏賞」は、大賞を炭田紗季(絵画)、奨励賞を小林正秀(写真)と中原幸治(工芸)が受賞しました。数年後に彼らが出品する受賞作家展では、来年度の受賞者との出会いも含め、さらなる展開が見られることでしょう。受賞者それぞれのこれから、ご注目いただけましたら幸いです。

## 秋月、都城へ

中村 麻里子(主任学芸員)

秋月等観は、雪舟等楊(1420-1506?)の門人中、最有力画人であった。また雪舟より画法伝授の証として《七十一歳自画像》を附与され、入明した際にはそれを携行し明の文人青霞から賛を得たことでも知られている。秋月は本姓を高城<sup>たき</sup>氏と称し、もと薩摩(鹿児島県)の島津氏配下の武士であったとされる。出家して、雪舟が山口の画房雲谷庵にいた頃に弟子となり、師の画風を最も忠実に受け継いだと目される。

このたび、都城島津邸・都城市立美術館合同展「都城 美の足跡～雪舟ゆかりの絵師から現代作家まで～」(会期:平成27年12月19日-28年2月7日)において、当館所蔵秋月等観筆《芦雁図》《白鷺図》が雪舟の《渡唐天神図》《蜷子和尚図》とともに展示された(会期中展示替あり)。室町時代、水墨画を山口にて習得し、故郷へ持ち帰った秋月は、同展および同図録中に「薩摩画壇にとって最重要人物」として大きく紹介されていた。有満さゆり氏(都城島津邸学芸員)による解説文には、以下のように記される。まず「高城氏系図」の中に高城重兼という名が記され、「重兼、下総守、高城権現、僧名等観、又朴也、画号秋月」と書かれており、高城重兼と秋月等観は同一人物と考えられる。また薩摩藩絵師木村探元(1679-1767)による『三暎庵主談話』の秋月の項には、「庄内(都城盆地一帯)の山伏惣職である寿福坊等見は、画僧秋月の一番弟子であり、秋月から等見へと伝えられた水墨画の流儀は庄内のあちこちで見られる」とある。これらにより、「雪舟～秋月～等見」と雪舟画系は繋がっていく。また等見の子孫にあたる財部盛陳が描いたと伝わる《波図屏風》6曲1双も大変立派な作品で、16年ぶり修復後初の展示とのことであった。

筆者は1月24日(日)に同展を観覧し、渡邊雄二氏(九州産業大学教授)による講演会「雪舟と都城」を拝聴するつもりであったが、折悪しく九州中心に大雪の日。昼前には着く予定の会場に到着したのはなんと午後3時過ぎで、天候には抗えず残念なことだった。それはともかく当館蔵の秋月作品が、約700キロメートルも離れた南九州・都城にて大きく紹介されたことは、誠に誇らしいことと思っている。



秋月等観《白鷺図》室町時代(15-16世紀) 本館蔵



## 展覧会スケジュール

3月  
March

3月18日|金|—5月8日|日|

### 【特別展】 世界を魅了した陶芸家 宮川香山 没後100年 虫明焼と明治の陶芸

宮川香山(1842-1916)は初代楽長造の四男として京都真葛原(現東山区)に生まれました。父の跡を継いで陶業を始めた香山は、明治初年、備前で虫明焼の指導にあたっています。その後、横浜へ移住し眞葛窯を開窯、職人たちとともに輸出用陶磁器を製造し国内外の博覧会で輝かしい成績を取め、明治を代表する陶芸家として活躍しました。本展は、2016年に没後100年を迎える宮川香山について、本県虫明焼の歴史とその発展に寄与した香山を顕彰し、日本の近代窯業界の寵児として世界に名を馳せた香山の優品を紹介します。

各展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

4月  
April

4月17日|日| 14:00～15:30

記念講演会 「虫明焼作陶への思い」  
講師 黒井千左(陶芸家・県指定重要無形文化財保持者)  
会場 2階ホール(先着210名)

5月  
May

4月23日|土| 9:30～11:00、12:30～14:00、15:00～16:00

4月24日|日| 9:30～11:00、12:30～14:00

W S  
「Myデザインの薩摩ボタンを作ろう」  
講師 室田志保(薩摩志史主宰・薩摩ボタン絵付師)  
会場 地下1階研修室(定員各回先着4名・要申込)

6月  
June

5月27日|金|—7月10日|日|

### 【特別展】 原田直次郎展 西洋画は益々奨励すべし

日本近代洋画の礎を築いた原田直次郎(1863-1899)。20歳でミュンヘンに留学した原田は、美術アカデミーで西洋絵画を学び、終生の友情を結ぶことになる森鴎外と出会います。帰国後は、当時の洋画排斥の潮流の中で《騎龍観音》のような優れた作品を精力的に発表しながら、画塾「鍾美館」を開いて後進の育成にも努めました。本展は、原田の作品や資料などに加え、交流関係のあった画家や弟子たちの作品をまとめて紹介する回顧展です。

6月4日|土| 13:30～16:00

シンポジウム 「原田直次郎の画業をめぐるって」  
パネラー 児島薫(実践女子大学教授)  
鐸木道剛(東北学院大学教授)  
鍵岡正謹(当館顧問)  
会場 2階ホール(先着210名)